



2019.10.10



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■日本で育つ■

ハーフと日本語

木村 奈美恵

2■高校進学進路ガイダンス情報(10、11月)■

=====

1■日本で育つ■

日本生まれの木村さんは都内の大学4年生で、自分と同じような境遇にある若者、もしくは在留外国人を支援する職を求めて就活の真っ只中です。名前も話し方も日本人と何ら変わらないようでも、内面にずっと抱えてきた悩み、困難、それを知る自分だからこそ、できることがあるはず、そう思うに至った軌跡を書いてくださいました。

.....

ハーフと日本語

木村 奈美恵

私の母はタイ人で父は日本人である。21歳まで二重国籍だったが、現在は日本国籍だ。日本で生まれ育ち日本の教育機関で教育を受け社会では日本人として扱われている。しかし、私の心の中では完全に日本人ではない。そしてタイ人でもない。どちらの国籍でもないと思っている。なぜ私がこのように思っているかというと、日本語もタイ語もどちらも完璧でなく怪しいからだ。また、言語面以外、文化面でも曖昧なところがある。日本で生まれ育ったにも関わらず日本の文化が分からないことがあるのだ。例えば、おせちや年越しそばとい

う年末年始の文化を知ったのは12歳の時だった。

私は生後8ヶ月の頃から今でも年に一度母の帰省に付いてタイに行っている。物心ついた時からタイ語を話せるようになった。母が私にタイ語でずっと話してくれたおかげで日常会話のタイ語ができるようになった。また、帰省するとあちらにいる家族、母の友達、近所の人とコミュニケーションをしたのもタイ語を話せるようになった理由である。現在でも母と会話する時はずっとタイ語だ。父と話す時、学校、友達と会う時以外はタイ語を使う。

小学校の高学年の頃、国語や算数の授業で文章題や長文読解の問題を解いていた時、一度読んでも理解できないことがあった。何度も読まないで理解ができなかった。このことを母に言ったら「私はあなたに日本語を教えることができないし、お父さんは仕事でほとんど家にいないから日本語教えることができない。あなたは人の何倍も日本語の勉強をしなくてはいけないの」と言われた。この時やっと自分の日本語力の問題点を思い知った。自分は周りの友人たちとは違うということを改めて知った。しかし、日々の生活や学校の中でたいした努力はしてこなかった。なぜなら、私の日常の日本語は人に通じ、別に問題はないように思っていたからだ。

高校に入り、小論文の授業で先生に「君の日本語はほんとにおかしいね。自覚ないの？」と言われ、驚いたが、自分が書いた文がおかしいと全く思わなかった。それまで怪しい日本語を話し、書いたりしても、誰にも指摘されなかったのも原因だと思う。また、単語がわからなくても聞いたり、調べたりせず、友人に馬鹿にされるのが怖かった自分がいたのも事実だ。

高校3年生の時、担任の先生が「今まで辛い思いしてきたのね。あなたは頑張っているよ。分からなくてもしょうがないよ。その家庭環境なら。」と言ってくれた。この言葉を聞いた時、初めて世の中には理解してくれる人がいるのだと思った。私は思わず泣いてしまった。その後、日本語が分からないままではいけないと思い、知らない単語があると調べ、友人に聞くことを怖がらずに聞くようになった。それは今でも続けていることだ。だが、高校の国語の先生に日本語を基礎から学び直したいと伝えたが、「そんなことはできない」と言われた。やはり日本人として扱われていたからか、当たり前のことなんて教えられないと思われたのであろう。

そして外語専門学校に進学してさらに大きな壁にあたった。和訳をする課題

が出された時に、それぞれの単語はどのような意味か理解したが、文章にするのに苦戦した。また、英単語の勉強をした時に、日本語の段階から理解できないものもあった。この時自分は英語の勉強をするはずなのに、なぜ日本語の勉強をしているのかと変な感じがし、語学を学ぶのは自分に向いていないと思うようになり始めた。在学中このことで何度も苦しみこの環境に残っていいのかわからなくなっていった。

両親に勧められた私は国士館大学に三年次編入を目指すことになった。受験対策で何度も小論文を書くことになり、ここでまた指導の先生に指摘をされた。「あなたは家庭事情を言い訳にしているけどそれはよくない。自分が悪い。」私はとても悲しく、自分が真面目に日本語に立ち向かわなかったことを悔しく思った。同時に自分の日本語力がいかに足りなかったのかに再び気づかされた。

大学に編入してからは、一から日本語を勉強したいという気持ちが強かったため、留学生対象の授業が聴講できるよう大学に交渉した。結果、私は今までずっと望んでいた日本語の授業を受ける許可がついに得られた。そこでは改めて日本語と正面から向き合えた。嬉しかった。まさに学びたかったものであったのだ。

私は生まれ育った環境を恥ずかしいと思ったことはない。むしろこの環境で育ったからこのようになってしまったことは仕方のないことで、運命だと思う。どのような両親のもとに生まれたいのか選べないのが人生だ。日本で生まれ育ったのだから日本語はしっかりしていると勝手に思い込んでもらっては困る。確かに日本語が完璧なハーフも多いが、中にはそうでないハーフもいるのだ。家庭環境は人それぞれだからだ。そのことを多くの人に分かってもらいたい。日本の教育機関は日本国籍の子供たちの中にも私のような人たちがいるということを気付いてもっと配慮してほしいと切に願う。
